

第 17 回中医学会勉強会 漢方応用講座

講師 路京華 老師

レポート：岸奈治郎（館林厚生病院漢方内科）

開催日：2015 年 8 月 1 日

今回は前回の症例の治療経過を通じて弁証論治の勉強をする方法でした。

第 2 診からの経過を供覧しつつ、路先生が解説を加えていくというスタイルで進行しました。

【第二診】14 日後

眩暈、眼瞼浮腫はずいぶん軽くなった。自汗、口渇も改善した。

食欲は普通で、便は形があるようになってきており回数も 1 日 1 回となった。

小便は順調。イライラが少なくなり、睡眠も少し改善したがまだ良く眠れない。

舌：淡紅色、胖大、薄い薄膩苔、齒痕有り

脈：弦緊濡

最初の治療で湿が改善してきた。汗をかくというのには色々な原因がある。表が虚して汗が漏れ出してしまう場合が有名だが、この場合には黄耆を良く用います。

この症例の場合にはなぜ自汗かと言うと肝陽が上亢するせいで汗が出ていると考えられる。ですから陽気を降ろす治療を第一診のときに行ったことで自汗も、口渇も改善した。また、便の形がなく 1 日 3 回あった排便が、便の形が整い 1 日 1 回となった。これは中焦、つまりは脾胃がよくなったと考えられる。

舌の苔が第一診では薄白苔だったのに対して、第二診では薄白膩苔になっており、より湿を考えさせる所見である。これは湿が強くなったからではなく、肝陽上亢による標証を除いたところ本証である湿の徴候が現れてきたと考えられる。

また湿による熱があるのに第一診でも、第二診でも舌の色は「淡紅」と熱を思わせるような所見ではない。本来は陽気が弱いからである。今は湿邪による熱が元の陽虚をサポートしているので元の陽虚を補完しあって熱の所見が舌には出ていないということだ。

葉天士は温熱論の「論湿」という項目中で下記の如く述べている。

「且吾吳湿邪害人最廣，如面色白者，須要顧其陽氣，濕盛則陽微也，法應清涼，然到十分之六七，既不可過於寒涼，恐成功反棄，何以故耶？濕熱一去，陽亦衰微也；面色蒼者，須要顧其津液，清涼到十分之六七，往往熱減身寒者，不可就云虛寒而投補劑，恐炉烟虽熄，灰中有火也，須細察精詳，方少少与之，慎不可直率而往也。又有酒客里濕素盛，外邪入里，

里湿为合。在阳旺之躯，胃湿恒多；在阴盛之体，脾湿亦不少，然其化热则一。热病救阴犹易，通阳最难，救阴不在血，而在津与汗，通阳不在温，而在利小便，然较之杂证，则有不同矣。」

（顔が白いものは陽気に注意を払うことが必要であって、湿が盛んであれば陽は微弱である。清涼剤による治療は6,7割で良い。湿熱を去ると陽が衰弱するからである。

顔色が蒼色の者は津液への注意が必要であって、清涼剤による治療は6,7割で良い。日頃寒がりの人の虚寒の患者になぜ補剤を使わないかといえ、それは炉の煙は消えていても灰の中に熱があるからだ。注意深く診察をして薬を少し与え、その反応に従う。

また酒飲みは常に湿が盛んであり、外邪が侵入すると裏の湿と合わさる。

陽が旺盛な体は往々にして胃に湿が溜まっている。

陰が盛んな体は脾の湿が少なからず、その湿がすぐに化熱する。

熱病を治療する場合、陰を救って、陽気を通すのが最も難しい。陰を救うのは血でなく津液と汗である。陽気を通すには温では無くて、小便を利して行う。

温病は雑病と違って、同じ熱であつても治療は同じではない。）

湿は陰邪であるため陽気を阻害し、陽気めぐりを悪化させる。雑病の時には温めて湿を取る方法が一般的だが、温病の時には小便で出すというのが鉄則だ。

〔弁証〕

沈肝降火 利胆和胃 芳化湿濁 安養心神

〔第二診の処方〕

生石決明 20	天麻 10	竜胆草 9	葛根 12
川芎 9	茵陳 12	茯苓 15	旋覆花 9包
清半夏 9	厚朴 9	蒼朮白朮各 9	石菖蒲 12
藿香 10	草薢仁 4	青陳皮各 9	炒棗仁 15

・ 草薢仁 そうずにん 草豆薢そうずく

辛温 脾胃 ショウガ科草豆薢の成熟種子

砂仁、白豆薢、草果などと類似した燥湿温中薬。行気作用が良く、健脾・止嘔・止痢作用に優れる。前出の生薬との行気作用・燥湿作用の強さの関係を表にすると下記のようなになる。

	砂仁	白豆薢	草豆薢	草果
行気作用	大大	大中	中大	中
燥湿作用	中	中大	大中	大大

・ 茵陳蒿

今までの治療方針を守ってわずかに調理した。

陽熱を去るも陽気は微弱で、瀉肝偏寒、調中偏温

清利肝胆：茵陳 旋覆花

安養心神：酸棗仁 石菖蒲

【第三診】

最近辛いものを良く取っている。血圧は 130-140/80-90mmHg。

少し頭痛がする。朝起きる時に眼瞼の浮腫を感じる。

朝起きた時に、2, 3回排便がある。便は柔らかくて形にならない。

汗をかくことが少なくなり、口渇は感じなくなった。

数年前に交通事故にあって以来、左下腿がいつも冷たい。

脈：弦緊

舌：淡紫暗 薄白苔水滑

〔処方〕

明天麻 12	生石決明 20	竜胆草 8	茵陳 10
薏苡仁 20	白朮 9	猪茯苓各 15	菖蒲 12
川棟子 9	大腹皮 9	炒山藥 12	丹参 12
牛膝 12	木瓜 10	葛根 10	青陳皮各 9

14 日分

ここでは湿を取りたいので猪苓、茯苓を付け加えた。

脾胃を補うために山藥を付け加えた。

足が冷たく舌が暗紫色なので活血し巡らせるために丹参・木瓜・牛膝を加えた。

山藥と人参・黄耆の違いとしては、山藥は脾実作用であり、消化吸収を高めてその結果気が増える所が、人参や黄耆は直接気を増やす作用であるため、今回の症例では適合しない。

牛膝は川牛膝と懷牛膝の別がある。

- ・ 川牛膝 ヒユ科センゴシツ 四川省産のものをセンゴシツと呼んでいる。活血去瘀血作用に優れる。
- ・ 懷牛膝 ヒユ科モンパノイノコズチの根。河南省などで栽培されている。補肝腎、強腰膝作用に優れる。
- ・ 土牛膝 イノコズチ属植物の野生種 活血通淋、清熱利咽作用に優れる。

日本産の和牛膝はヒナタイノコズチの根とされているのでいわゆる普通の牛膝。

頭痛があるため舒筋作用を期待して木瓜と薏苡仁を入れている。

黄帝内経、素問、正気通天論には

「因於湿、首如裹、湿熱不攘、大筋繆短、小筋弛長、繆短爲拘、弛長爲痿」

(湿邪によるものは、頭部が布に巻かれたように重い、湿と熱が重なり除去できなかった

ら、諸筋が損傷され、短縮或は弛緩になる。短縮されたものは痙攣となり、弛緩となったものは痿弱となる。)

とあります。つまり湿や熱は常に筋肉や筋（すじ）を障害するので、木瓜や薏苡仁を使うことで湿を除き結果として舒筋作用を示すということです。

- ・ 木瓜 酸 温 肝脾胃 バラ科ボケの成熟果実、またはカリンの成熟果実
去湿舒筋通絡、化湿和胃作用があり、筋肉の拘縮、転筋（筋肉の痙攣、腓腹筋の痙攣を指す事が多い）を治し、中焦の湿を除く。一切の転筋の要薬と呼ばれ、軽度の生津作用もある。穏やかで長く効く特徴がある。
- ・ 桑枝 苦 平（やや涼） 肝 クワ科マグワの若枝
上半身の風湿痺証に多用される。
- ・ 薏苡仁 甘淡 微寒 脾胃肺 イネ科ハトムギの成熟種子
補益性があり、利湿健脾、利湿徐痺、清熱排膿の作用がある利湿滲湿薬

頭痛という葛根湯が有名ですが、葛根湯の作用としては葛根と芍薬です。芍薬は養血柔筋によるもので、葛根は陽明・太陽経の経絡、経筋が邪によって不利となったために生じた筋肉のこわばり、頭痛を治療するものです。

津液は利用できなければ水邪となるので、巡らせるか乾かさなければいけない。津液が汗として出るときには気も一緒に漏れてしまうので注意が必要。そういうときには生脈散が適応になる。

辛いものを沢山食べると発散して陰を傷つける。この人はもともと脾虚があるところに辛いものを食べ脾陰が傷ついた。

「岐伯曰、陽者、天氣也、主外。陰者、地氣也、主内。

故陽道実 陰道虚 。故犯賊風虚邪者、陽受之。食飲不節・起居不時者、陰受之。」

（陽者は天の気を受け外邪を主る。陰者は地の気を受け内邪を主る。陽は則ち実、陰は則ち虚。外邪が人を犯すと先ず陽を傷つけ、食事や生活の不摂生で生じた内邪は陰を傷つける。）

「実則陽明 虚則太陰」陽明は大腸 太陰は脾。

虚すれば則ち脾陰が傷つく。

脾陰虚の方剤としては

● 参苓白朮散 （太平惠民和剂局方）

蓮子肉 薏苡仁 縮砂仁 桔梗 白扁豆 白茯苓 人参 甘草 白朮 山藥

脾は唾を主り、腎は涎を主る。脾陰が虚すると唾液が少なくなる。

【第四診】

処方された薬を 14 日分飲んで、すべての症状が改善された。

今の症状は自汗。食欲は良好。小便、大便順調。睡眠良好。血圧正常範囲内。

(処方)

前回処方から猪苓、茯苓を除き 荷叶 6g 六一散 (滑石+生甘草 6 : 1) 20 包
を加えた。

・荷叶 (hé yè) : 荷葉 スイレンの葉 苦甘 平 心・肝
香りが高く、清心解暑、散瘀止血、消風祛湿の効能がある。